

F-ROAD SUPER-BEETLE PROJECT

エフロード・スーパービートル製作日記

目指せ草レースの鬼!

前回は分離したボディだけを鍛金・塗装のプロ、日栄自動車へと運び込んだ。

そして月日は流れ、FSB(F-ROAD SUPER BEETLE)がこんななつちまった!?

軽く考えて「ま、見栄え良くヨロシク」と頼んで福島を後にしたもの。

どうやらボディ復活の作業は、想像以上に困難を極めた模様。

ボディ全てに手が加えられ、とりあえず色塗り段階一歩手前まで来たFSB。

その苦難の道程を紹介する。復活はいつだ!?



文●半谷範一 撮影●村上 豊、日栄自動車

取材協力●ベストインポートサービス TEL:048-282-6119 <http://www.vw-bis.co.jp>

スピードジャパン TEL:03-3555-8865 <http://www.speedjapan.co.jp/>

日栄自動車商会 TEL:024-534-9680 <http://auto.jocar.jp/nichiei/>



ナンバー付きで草レースを楽しむ
簡単な作業に思えるがなかなか!

前回はBIS(ベストインポートサービス)さんでシャーシから分離したボディを、福島の日栄自動車さんに持ち込んだところまで紹介したが、今月はそのボディの進行状況をお知らせすることにしよう。

私自身も経験があるのだが、旧いクルマのボディを修復する場合、最初にどこまでやるかを決めておかない限りが付かなくなってしまうのだ。明確なゴールが存在しなかつたばかりに、時間もお金も際限なく掛かり、それでも完成することなしにプロジェクト自体を放棄してしまうというケースは、別に珍しくもなんともないのだ。

今回のFSBに関しては、あくまでナンバー付きで草レースが楽しめる仕様ということなのでオリジナルには拘る必要がなく、そういう点では一見楽そうに見えるかもしれない。しかし、ちゃんと着地点を想定しておかないと、中途半端なものになってしまふという点では同様だろう。

FSBのベースになったVW1303SSのボディは、同年代の個体としては決して程度が悪いクルマではなかった。しかしボディだけの状態にしてみると、やはりあちこちに修復が必要とされるような錆穴などが存在していた。残念ながら今回の企画の場合、そういったところをオリジナル通りの方法で修復することは時間的にも予算的にも無理なので、写真のような方法を選択することにした。

レース中のクラッシュによって歪んだボディ後端に関しては、フレーム修正機を使用して修理を行なっている他、ハードな走行で歪んでしまったフロントのアッパーマウント周囲には補強を加えて対策することにした。

初歩の钣金を終え、いよいよ色塗り段階へと突入!!

钣金待ちのFSBはこんな状態



レース用とはいえ下地から仕上げての塗装をお願い

これが日栄自動車さんに持ち込まれたときのFSBの状態。こうやって見ると、元の色が水色であったことが良く分かるだろう。実は『スピードジャパン・カラー』であるオレンジ色は、日栄自動車の鈴木専務がテスト用の塗料を使用してたったの1日で塗ったというものは、日栄自動車の鈴木専務がテスト用の塗料を使用してたったの1日で塗ったというのも、あくまでレース用の塗装ということで貧乏チームのクラッシャーズでは全員大満足の。しかし、今回の企画であるFSBプロジェクトでは、エフロードの看板として色々なイデアがあった。しかし、今回の企画であるFSBプロジェクトでは、エフロードの看板として色々なイデアがあった。しかし、今回の企画であるFSBプロジェクトでは、エフロードの看板として色々なイデアがあった。しかし、今回の企画であるFSBプロジェクトでは、エフロードの看板として色々なイデアがあった。



フレーム修正に四苦八苦

ボディだけでは柔らかすぎて修正機で修正することができない……さてどうする?

このクルマを草レース用として入手したときには修復歴なしの状態だった。しかし、昨年8月にヒーローしのいサークルで行なわれたY' CUPの4時間耐久戦でスピニ、クラッシュしてしまったため、ボディの右後端が歪んでしまった。オフロード用のバハバグ等ではこの部分をカットしてしまうことからも分かる通り、直接ボディ剛性には影響を与えない部分だが、やはり日栄自動車さんもプロの仕事としてそのまま適当に済ませる訳には行かない部分なのだろう。フレーム修正機を使用して、この部分の修正を実施している。今回持ち込んだのがボディだけだったので、そのままでは柔らかすぎて修正機で修正することができない(引っ張ってもボディ全体が歪んでしまう)。そこで、写真のようにスチールを溶接してダミーのフレームを作成し、その上にボディをボルト止めして作業を行なった。



フェンダーその他の鉄金作業

足回り強化!



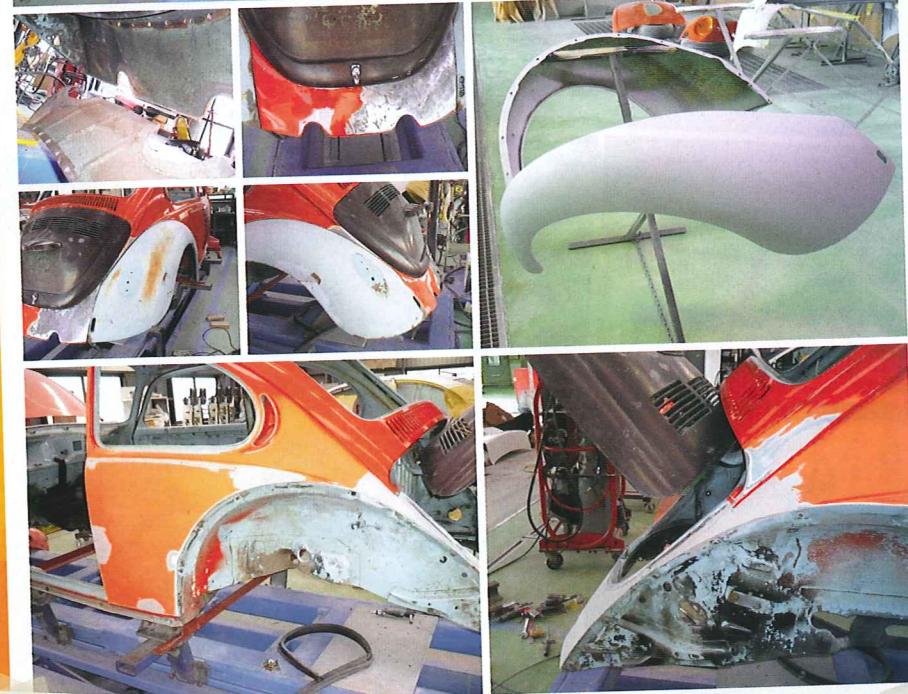
ストラット・サスペンションの
アッパー・マウント周囲の強度を高めるのだ

通常のVWビートルのフロントサスは、上下に平行して横置きのトーションバーを配置するというダブルトレーリングアームとなっている。しかし、当時の上級グレードであった1302系／1303系のモデルに関しては、このクルマのようなストラットのサスが採用されていた。当然、サーキット走行等する場合、これらのストラット・サスペンションのモデルの方が圧倒的に有利だ。しかし、残念ながら当時のVWビートルはサーキット走行といったハードな使用状況を想定して開発されているわけではないため、アッパー・マウント周囲の強度が十分とはいえない。このクルマに関しても、ストラットの上部には損傷が見られた。そこでBISの山崎社長からのアドバイスもあり、このFSBではその部分に補強を追加することにした。もっと簡単な物を想像していたが、中村さんが製作したのはこのように美しいものだった。



リアフェンダーとリアフードは BISのストックヤードから拝借

リアのフェンダーはクラッシュで変形した物は廃棄処分にして、BISさんのストックヤードにあった程度の良い中古フェンダーを使用することにした。リアフードは中央にオイルクーラー装着の名残である穴が開いていたため、こちらも程度の良い中古に変更している。リアのエプロン(フードの下側)部分は、クラッシュで歪んでいたので修正。この部分は本来二重になっているのだが、担当の中村さんはちゃんと内側の部分を取り外し、鉄金で修正してから再度取り付けてあった。



ボンネットの穴塞ぎも完璧



ケルシャーのFRP製フロントフードの穴も完璧に塞いでしまう!

フロントフードは軽量化のためにドイツのケルシャーのブランドで販売されているFRP製を使用していた。以前、4時間耐久レースで無休油作戦を実施したときにトラック用の100ℓタンクを装着した名残で、フード上にはフィラーキャップが突き出た。こうやってサフェーザーの状態になっていると、どこに穴が開いていたのかまったく分からなくなる。

タワーバーで補強済み



これがフロントフードの内部。現在は外されているが、本来はここに燃料タンクが収まっている。現在装着されているストラットタワーバーは日産自動車のオリジナル。実はこのタワーバー、他車(車種は不明)のバンパーの所に入っていたいレ

次号予告

ボディカラーは…!?

次回はこのFSBの塗装編をお送りする。当初は艶消しのグレーにすることか何とかいっていたけれど、実際に塗ることになったのは当初の予定とはまったく異なる色。ヒントは右側の色見本。詳しくは次号を待て!

ボディの腐りを補修



ボディの腐りが発生していた部分は鉄板で溶接して蓋してひと安心

フロントのインナーフェンダー後側は、リアピラーの部分と並んでボディの腐りが発生しやすい部分となっている。一見きれいなクルマでも、この部分が腐っているというケースは珍しくない。このFSBも同様で、雨のレースのときにはここから雨水が室内に侵入していた。もしこの部分を完璧に修理しようと思ったらかなり大がかりな作業となることもあり、今回は錆の除去と鉄板を溶接して穴に蓋をするという作業で我慢することにした。



ボディ全体を手直し!



きちんとした下地の処理こそが仕上がり具合に大きく影響するのである

このFSBの作業をメインで担当してくださっている中村さんに、今回の作業で何が一番大変だったかたずねたところ、即座に「下地の処理を行なうですね」という言葉が返ってきた。やはりきちんとした下地の処理を行なわないと、最終的に美しい仕上がりは期待できないからだ。当初はもっと簡単な方法も想定していたということだが、やはり職人さんが自分の仕事としてやる以上、納得の行く仕事をしたいと考えるのは当然のことだろう。鈴木専務に確認したところ、今回の仕事に掛かっているコスト(つまり実際に掛かっている作業時間という意味だ)は、前回このクルマをオレンジ色に塗ったときの10倍以上だという。



ビートルの鉄、素晴らしい過ぎるという話

中村さんと話をしていたら「ビートルは鉄が良いからやりがいがある」といった話になった。どうやらその話は、VW乗りの間だけで語り継がれている伝説ではなかったようだ。上は中村さんにサンダーでアライアードを研いてもらった写真。混ぜ物が多い現代の鉄では、同じ番手のサンダーで研いても傷だらけになって艶消し状態だというが、ビートルでは美事な鏡面になった。また、表面の錆も内部までは進行せず、鉄が生きているという。

そしてついに、色塗り一歩手前の段階へ!



ここまでいたら後はボディカラーを決めて塗るだけなのだが…

ボディの歪みを修正し、下地をきちんと整えたのがこの写真的の状態。こうやってみると、VWビートルのオリジナルの姿が分かって面白いし、これはこれでオブジェになると思いませんか? 未組み立てのプラモデルのように、このまま箱で出来上がった段階では、まだどんな色に塗るのか全然決まっていなかった!